

栗津の夕嵐（角光嘯堂）

栗津野の夕嵐 肌を劈き

如月の空は 暗し 黄昏の 時

銀鞍 白馬 先陣を 競い

一騎 挑戦 春風を 断つ

柳眉 相対す 勇婦の 勢

百千の花弁 夕陽に 輝く

紅裙 風に 靡る 栗津の 原

征馬 嘶き 罷んで 辺境 閑かなり

作者略歴 京都壬生の儒家に明治二十四年十二月十一日に生まれた。九州小倉中学を経て九州大学国文科を卒業。漢学を大分日田の広瀬淡窓の塾で研究し、その後、二十年間、日本大学国文学の教授を勤めた。全国朗吟文化協会初代会長、淡窓流宜園調宗家・家元で文学博士。

解説 源頼朝が送った源範頼・義経の軍勢により、栗津の戦いで討たれた源義仲を詠った詩。

語釈 ※栗津野 滋賀県大津市南部の地名。瀬田川と琵琶湖南西岸に面し、古くから交通の要地であった。源 義仲が戦死した場所。※夕嵐 夕方に吹く強い風。ゆうべの嵐。※劈 さく。ひきさく。※如月 日本における旧暦二月の異称。※黄昏 夕方の薄暗い時。夕暮れ。暮れ方。たそがれどき。※銀鞍白馬 白馬に取り付けた銀製の鞍。※先陣 一番乗り。さきがけ。※柳眉 柳の葉のように細くて美しい眉。美人の眉にたとえていう語。※勇婦 勇ましい女。勇氣のある婦人。巴御前のこと。※花弁 花びら。※夕陽 ゆうひ。いりひ。※紅裙 紅色のすその意。美人。※征馬 従軍する馬。※辺境 中央から遠く離れた地帯。国さかい。国境。

通釈 栗津野は肌を引き裂くほどの強い風が吹いていた。如月の空は暗く夕暮を迎えていた。義経の軍勢は先陣を競い、春風をも断つ勢いであったが、迎え撃つは巴御前率いる勇婦の面。栗津野の辺りは花弁が舞い壮絶な戦いを繰り広げたが、戦いは終わり栗津野は平静さが訪れていた。